タントキリスト者」の〈原爆意識〉アメリカ占領下における「プロテス

―長崎を視座として―

服部 康喜

、前提的考察

識〉 う歴史的 って、 が いては歴史的に ては懐疑的にならざるを得ないからである。 言っても、 のような指 0 他者: あったと考えられるからである。 の形 クトルを [体験] そして、 \mathcal{O} 論 共 事 成に決定的 接 \mathcal{O} 実は、 的な 通体験や共通 何 共通した内実を持ち得 標を提示したの 前 0 ょ 提として、 この現実を考察するにあたって、 質と密度に大きく依存 りもその 想定することが必要で 「原爆体験」 米国」 あれ に関わっていることを認めざるを得 ほど 多 という 長 意識を生み出 は、 0 様 崎 性 と「米国 市 惨禍をもたらしながら、 を生み 長崎市民の 民 「他者」のイメー ているの 0 敢えて言えば、 〈原爆意識〉 出したのは はないかと思う。 していたからではな しはしなかった。 」という「他者体験 か、 〈原爆意識〉 その場合、 という事 を考えるに ひとまず長 米 原爆投下とい が 必ずし 国 これ 長崎 と一言で 柄に 敢えてこ な 〈原爆意 という 1 1 ・だろ も長 にお *の* あた 崎 が現 事情 . 対 し

> 者」 が有 \mathcal{C}_{i} に対する親近感を深めることはあっても、 密度と質から、 タントキリスト者」 に遠いことを指摘するに留めよう。 \mathcal{O} ックキリスト者」 プロ 強い「反共思想」 に焦点を絞って考察することになるが、 その 効であると考えられる。 テスタント 他 \mathcal{O} 長崎 ひと括りの社会的集団として考えてみよう。 に関して言えば、その象徴的 キリスト者」と「カ 市 \mathcal{O} と宗教的な 民」という三つの グループを「米国」という「他者体験 ここでは 「受難 ひとまず、 カテゴ トリッ 「プロテスタントキリスト **(**燔 憎悪と反発からは遥 祭 リー クキ 取り敢えず 長崎 思 人格である永井隆 想 リス を想定すること \vec{O} は 1 「プロテス 者 「米国 力 トリ お \mathcal{O} カ ょ

学校) 者 国 た。 のは 市 えキリスト スト教的な色彩は両校共に脱色状態にあったが、 ○○名を越える生徒を有 派の強力な支援のもとに存続していたことは明白な事 市内のプロテスタント教会のすべては 0 活水学院」(女学校・高等女学校・専門学校) 市街地に六教会を数えていた。この中には、英国国教会系 太平洋戦争中、 との濃 教会」 狭 加えて、 「米国聖公会外国伝道委員会」であって、 があり、 意識 一 隘な土地と居住人口の密度から見れば、 - 者で が含まれるが、 \mathcal{O} 長崎市内にはミッションスクー 中で 関 戦争末期においてすら、それぞれ一〇〇〇名と九 係 なくても、 長 は歴然として生き続けてい は 崎 歴史として個々の \mathcal{O} プロテスタント教会はそう広くない ていた。 その成立と維持にあたって支えてきた 米国」 という もちろん、 米国」 ープロテスタン 他 たのだっ ルとして創設され と 者 国 相 のキリスト教諸 その意味では長崎 「鎮西学院」 対的 それ以前の 策に従ってキリ \mathcal{O} たし、 影は、 に広範囲 トキリスト 事実であ 0 米 長 聖 た

どの 前提とした上で、 新 わ たって浸透していたと言 ように長崎という地 および 「長崎 戦 後、 日日新 具体的に に射していたのだろうか。 つて 聞 0 11 いだろう。 記事を追跡した報告である。 米国」という そのことを歴 他 以下は |者 吏的 「長崎 0 影 は な

二、八・一五前後の長崎

示され 見 出しは 日本の 歴 一史は ていることに屡々気づくものだ。 虚勢と重大事態の到来を鮮明に照らし出. 後 「…」で示すこととする。 から 振 り返るならば、 次に襲う事件の暗 「長崎新聞」 してい 示 は戦争末期 が た 前 もって 以下、

を恃 殲 敵 しめる。 は 「又も長崎 滅 愾心を燃やし、 敵 迫 0 の無知、 れり」と題した謀略伝単を んで平和の美名のもと世界制覇の 神機至る」 へ・幼稚な敵伝単・一 低劣に呆れ返ると共にかうした奴らが物量のみ 彼らが呼号する 0 われわれの決意と信念を確乎不動 撒 億に動かぬ必勝信念」: 布…この伝単を拾つた市民 「時は迫 野望に狂 (一九四五 れり」 奔することに は却つて敵 · 八 · = 「時 足ら

この五日後、「長崎新聞」が記すのは次の見出しである。

長崎 市に原爆が 広 害 島市 鬼畜 侵入の 投下されるの 0 残虐性 В 29 敵機非道の暴爆募る」 • 新型爆 は この 弾を使用 記事が掲 カコ 載され わが方に相 た翌日 (同八・八) 当の

おそらくこれが検閲の実態なのだが、なによりもその虚偽に長崎「長崎市に新型爆弾・被害は僅少の見込み」

月

九

月日だ

が

翌

 $\overline{}$

日

. (7)

長崎

新

聞

は次のように

報じてい

た。

抗 市 民 議 は気づい を行うの は二日後のことであ ていたはずである。 日 本 政 府 が · 米 国 に . 対 L て 正 式

に

部隊 ここに伺えるの 乱を演じさせることになる。 次のような「号外」(「西日本新聞」) という見出 対する日本政 するは、 • すべきことを厳重に要求する。 を糾弾するとともに即刻かかる非 5 投射物にも比し得ざる無差別残虐性を有する本件爆弾を使用 重 「残虐例、 長崎へ握飯の奔流・ の名において、 抗 議 .. L 人類文化に対する新たな害悪なり、 府の のもと、 を見ず・ は、 しかしてい 衝 米国 撃の深さである。 復旧 また全人類および文明 新型爆弾の害毒 政 に立ち上がる長崎 トラックで素早く配給 府 まや新奇に の抗議という形を取 が それは 人道的 して従 同 毒ガスを凌 じ日 の光景を描く一 来の に飛び交うという混 0 0 兵器 殊 名において米政 本国 強駕 勲 如 0 \mathcal{O} 政 何 なる兵 た、 諌早 使用を放棄 府は茲に自 帝 (八・一五) (八·一三) 玉 -の炊出 原爆に 一米に 方で 府 厳

発せらる・太平への大御心御宣示」「大東亜戦争終結の聖断降る・四国共同宣言を受諾・大詔煥

る。翌日、「長崎新聞」は次のような見出しの氾濫を見せることとな

愛 謝 御 玉 音 \mathcal{O} 言葉畏し 御 奉 肺 ~る」・ 聖断 腑 に 徹す 異例の御 英霊も瞑せ国 億拝す大御 総 力国 前会議 家再 1土再建 心 建 畏き玉音に日 阿南陸首自 に 傾 苦難 倒 窓び 忍び 刃す 本 玉 四体護持 \mathcal{O} 難 「一死大罪を 涙 きを忍ぶ」 大慈大

(八・一六)

原爆投下から祖国再建へ、その見事な変身は現在から見ると異様

の芝居に似ていた。た観念的な変身の劇であり、いまだ「他者」の影が射さない一人でさえある。しかしそれはある意味で、日本の内でのみ起こりえ

れようとしていた。その美しい仕草は「一億総懺悔」という姿態の中に直ちに生かさその美しい仕草は「一億総懺悔」という姿態の中に直ちに生かさ子)に感情移入的に役割を交換し合う不世出な俳優に似ていた。こうした一人芝居の役者は誰だろうか。それは天皇と臣下(赤

くのである。 (ハ・二四) マベきではないか、全国民が真つ裸になつて同じ出発点につい要な最小限のものだけを御慈悲によつて頂くということにげ個人の生活に至るまで一切を陛下に奉置し、今後の生活上民ことごとくが努力の至らざりしことを陛下にお詫び申し上「衣食住一切を奉置・真つ裸で出直さう」: 今日において国

のは、もう少し後になる。な後背地に「米国」という「他者」がその身体ともども登場する分かち合わねばならない観念的な罪の総体であった。その観念的この時期、紙面を飾るのは「敗戦責任」であり、それは全国民が

二、再建への始動と「米国」

傷を伴わない出来事だった。 それは未だ敗北という感形を取ってである。長崎市民にとって、それは未だ敗北という感善まだ見ぬ「米国」という「他者」が姿を現すのは、進駐という

男性も屋内に」: 服装は必ずモンペを着用しアッパッパや下「長崎・連合軍進駐を控えて・女性は隙をみせるな・当日は

も女子は相手にならぬこと。
ロー」とか「ヘイ」とか又は片言の日本語で話しかけられて着のみで外出せぬこと、入浴行水等は遮蔽の上行ふこと、「ハ

報じている。同じ頃、原爆投下地浦上地区の様子を「長崎新聞」は次のように

・聖教徒一万が犠牲」・聖教徒一万が犠牲」・聖教徒・記念物として天主堂を保存の火葬・神の試練に立つ聖教徒・記念物として天主堂を保存「原子爆弾・一ケ月後の現地・被爆者続々と死亡・絶えぬ街

午入港揚陸・無邪気に明るく・長崎に上陸第一歩」・一六)。米軍が長崎に上陸するのはそれから間もなくである。その前途はきわめて困難なものであることが報道されている(九これと平行して、長崎市の復旧に必要な経費は一億円と見られ、

た。むしろ彼らは、古い友人でさえあったからだ。け、長崎の「プロテスタントキリスト者」にとってはそうであっ厳な事実を突き付ける恐怖感を与えなかったからである。とりわ勝ちを抱いたに違いないだろう。なぜなら、彼らは敗北という冷おそらく、当時の長崎市民は上陸した米軍兵士を見て、安堵の気に、立ての長崎市民は上陸した米軍兵士を見て、安堵の気

から指 香る活 海 日 八 「日米基督教 軍牧師 米信 日日 に定され 者の 水高 曜 \mathcal{O} 日の午さがりミッションスクー クラーク・リチャー 初会合が催された。 女の たエ \mathcal{O} さゝやかな一宇でキリスト教をめぐる敬虔な 集ひ ル ブリッジ・ 平和と親善へ通ずるまごゝろ」: 二十 W ド・クー 進駐軍側からは特に第二師団 ・ バ ートレイ中尉をはじめ ルとして古い伝統に 師 ゼームス・

暖 が恩讐を越え、 基督教を通じた日 じ L カン ス 督教 1 兀 1 人の 信仰への誠をもって語り続けられた。 が 牧師 戦争中に受けた影響、日 パ ル 師 民 それに篤 一族の垣を打ち除いてお互い 米の友好親善について等尽きぬ の三名、 日 信 本 の信者等が 側 からはず 本における基督教 対応、 武 **、藤活** の胸 Ļ 水高女校長は と胸 信仰 話しは の将来、 に交ふ \mathcal{O} 話題 日 本

 $(10 \cdot 110)$

再会した友人のごとく優しかったと言っていい。 は一〇年以上後のことである。「米国」という「他者」はこの時、日本の「プロテスタントキリスト者」が、「戦責告白」を行うの

明らか 再 付きを持つ「他者」でもあった。 建 L は幻想であることを知るほかはなかったのであ かし実は、 であ ŋ 「米国」という「他者」を除外し 彼らは 勝利者であり、 そのことは次の記事によっても 審判者でも た観念的 あ つ て、 にな国家 別 \mathcal{O} 顔

本 のは 政府と交渉してゐるやうな印象を与へてゐる。 権利を許されてゐない敗北せる敵である。 するやう希望してゐる。 も日本と連合国を平等であると看なさないことを明 方針」: して来た歪 敗 は 政 存 北の自覚を徹底・対等観 な 府 在し \mathcal{O} マックアーサー元帥 地 ない。 曲され 位に 0 さうして国民が連合国との たこ いて誤っ ユ 1 日本は文明諸国家間に地 た概念を持つことは許され ス \mathcal{O} は連合国が如 や歪曲厳 調子は恰も最高 禁・米の言論 諸君が 何 関係における日 なる点に 交渉とい 司 る国民に 令官 位を占 確 報道 · 一七) べるべき が 12 お ふも 提供 理解 管理 . 日本 「める V) 7

東京裁判」が開始されるのは翌年(一九四六)五月からであり、

者であ うな台詞 か 無条件降伏 れずに言えば、 たして日本国 な たのだ。 り ŋ, Ó 計は、 タイムラグ 冷厳な統治者であった。 をした敗戦国民としての自 民 敗北が共通認識になり得てい の共 おそらく太宰が書き記さざるを得なかった次のよ 通認識になり得てい が あったと見てい しかし、 1己認識 ` \` . たのだろうか。 ない 米 その が始 国 実相を雄 ような認識 まるまでに は決定 発用に語 飛躍 的 は を恐 は 果 勝 0

太宰の『冬の花 一五からのタイムラグは正確に測定する必要があろう。 日発行の雑誌 のに、 思ふわ。 くと思つてゐるのかしら、 たら、馬鹿だわねえ、 から隅まで占領され 負 えけた、 、 それ ほろんだのよ。 負けたと言ふけれども、 をまあ、 火』が掲載されたのは一 「展望」においてである。 て、 恥かしいとも思はずに、 いままでどほりの あたしたちは、 滅亡しちやつたのよ。 あたし 九四六年 敗戦の認識に関 は、 生活がいつまでも続 ひとり残 さうぢやな 田 (昭二一) 六月 舎の人たちつ 日 (『冬の花火』) ならず 本の 捕 玉 わる八 虜な . (T) 1 لح 隅

され、 また東亜局を国外局に改称して出発した。それは古い 常 が 月に成立した グ \mathcal{O} 五以後に 務 結 、が存在したことが指摘できるだろう。 だろうか。 それでは 理 成 事会」 国策 プロテスタントキリスト教を奉じる諸教 の推 お 「プロテスタントキリスト者」 日本全般のレベルで見るならば、 (八・二八) 「宗教団体法」により、 進 て戦後始 に積極的に奉仕することになる。 は、 めて開かれた「第一三回教団 戦 時報国会を戦後対策委員会に、 翌年に の場合はどうであった 九 は 四〇年 ほぼ同じタイムラ 「日本基督教 派はここに結 しかし、 昭]戦時 革袋に新 五 報国会 八• 寸 兀 集

て、 5 てい さ だろう。 醒を先づ我らの間に期し之が全土に波及せんことに努め〉 に奉仕するに怠慢〉であったことを懴悔 悔 誠 に 史と実績が もちろん、 に対する意識は おける日 ほぼ二〇年後 を訴えた」 体 V /そして、 ても反共という一線 \mathcal{O} が足らず 名 与に 米国 スト教の 7 く中で、 提唱に 持 称 〈反省 7 前 を それ 本基督: から た。 流 た 任 張 1 (『日本キリスト教団史資料集』第三巻・概観)。 念二徹 存在してい そのことの り付 た 呼応 懴悔 用 デモクラシ 国体護持のためにつくら 報 キリス 5 されたことは カン \mathcal{O} 拡 ば (一九六六・一〇) なみに 大は望 かりか 教団 キリス きわめて希薄と言わざるを得ない 国 け Ļ 雄 た 力 弁に ŧ 1 \mathcal{O} 〈陛下に対する至忠尚 天皇 小でキリ 戦後 主まし 責任 たの] 教 全皇 ト教界の 必要条件として百年におよぶ \mathcal{O} が で G 語 は \mathcal{O} 国 \mathcal{O} 扶植 H Q は · 乏し 最 だった。 G 1 についての告白」に見られる戦 あ 0 詔 · 状況 再 7 当 Ź Н 初 0 建》 動にあ 指 て、 には目 時 1 か 1 \mathcal{O} Q に実現される「第二次大戦 よう。 内閣 \mathcal{O} 導 教の拡大は歓迎 \mathcal{O} で キリスト教活 0 に キリ 者 そして、 たの あるとの認識 れた東久 各教会に みならず、 努め らわ 本におけるプロ \mathcal{O} である東久 えト で、 たとえば Ļ 人である賀 ほ ね れ 冷 邇 ば た 欠くる処 対 教がどの 敗 〈霊的道 なら 宮 戦と して 日 戦 動 〈聖旨 ですべ 、実情が 邇 構 を持 1内閣 を背後か 賀 本 なっ 宮 \mathcal{O} 造 な Ш 日 ように き事 支配 徳的 本 ĴП 内 が って テスタ あ ヲ わ は 0 固 伺 豊 そこには 奉 伝道 たことを 次 閣 V) n ら支援 争責任 ること とし 彦 態 層 定 わ 億 戴 \mathcal{O} わ 大覚 心と見 た。 シト れる 下に よう 評 にお 化 総懴 が 同胞 お \mathcal{O} ħ L 歴 た 玉 価 \mathcal{O}

> 留 流

史

7 リスト 教に 根を降 せ 日 本 \dot{O} 民主化 天 皇 廃 止 は 暗

> ことだったと思 る事こそが あ 誘 った、 致: 主 |義はあり得 日 日 望 本 本 まし が \mathcal{O} · 負け 敗 \ \ \ 因 今後は るとい な は キリ 軍 事 ス 的 日本に真実の ふことは \vdash 資源 教 義に \mathcal{O} 抑 不 根を降さな 足 Þ キリ より 最 初 ス カ t 1 5 道 教 判り 徳 1 限 が \mathcal{O} 復興す り日 切 頹 った 廃

大限 賀川豊彦に こうして「米国」 位に推していたことも事 る批判が起こるが \mathcal{O} \Diamond (植 出 \mathcal{O} 7 発点は 村正久の長女) おこう。 期待を持って支援に 0 双方の 、ては、 質川 は日本 キリスト者 の長崎 豊彦氏・ それ 戦 前と戦: れでも一 乗り出してい \mathcal{O} 実であったことを忘れ 訪問を記したもので 外 「プロテスタントキリスト 後の言 0 人記者と語る」 交流 時期、 から始まったことは 動 の落 た。 世 論 次の は彼 差など後年、 九 ある を首相 記 ては 匹 事 なら が は 者 候 植 彼に対 日米 な 補 記 村 憶 環 \mathcal{O} 五 交 女 最 第

す

ら長崎 今日こそ自己のためという観念を捨てゝ世 同 あ 十三日午前 植村女史長崎 戦後″ 題し 夜は ますところなく説 C A 幹事 ミル 義 て場内 諏 民友新聞社主 \mathcal{O} か 平 0 訪 本 和 質 荘 + を を 0 講 ドレ 時来崎。 使徒 埋 消 演 民 0 \emptyset • た聴衆 主 き 催 ッドリー、 か "として渡米 小さな観念捨てゝ り学び 主 \mathcal{O} 一十三日午 講 義 約 活 水女専 を前 0 演会に臨み とら うわ 時間 小 に 半に 民 その ね ベ 前 野 した植村環女史は を 井 主 ば 八時 ま 他 な わたって講演を 主 ユキ両女史とゝもに一 ーアメリカ 世 らねるの を訪 ŋ 六 義 界 界 分 ŧ T \mathcal{O} ゙メリ 長崎 人類 問、 せ ため ん。 では より帰りて」 発 力 \mathcal{O} に -後七時 ため なく、 日 列 0 励 ア車で大 米国 本 実 もう」 人は 民

しなければならぬことを痛感しました。…

(五・二四)

な政 5 すことか 0) 方向をまず取らざるを得なかった。それが 使 \mathcal{O} 義制度の は日本各地 国」という古い友人を確認したのだった。このことは、 大きく舵を取った日に帰還 の徴であり、 からの招待という形で行われた。 日 命は 米の ための 「プロテスタントキリスト者」は、 治的 生活 ププ 米国 素地は作られ 解説と学習活動を推し進めていた。こうして日米の な宣伝効果を持っていたと言える。その一方で、 ら始めたと言っていい。そしてその営為を通じて、「米 \mathcal{O} ロテスタントキリスト者」の交流は、 の小学校に教育担当官を派遣して、「米国」的民 日米の和 0 盤を破壊され 社会お よび ていったのである。 解を願う自然な心の姿だった。 尽くした日本側からではなく、 政 したかのように、 治、 そして、 思想、宗教、 鎖国制度を放棄して開 日本に帰国した彼 「米国」の 米国」 文化 当然のことな \mathcal{O} を学習 友への 紹 まさに日本 実際大き 介という G 米国 主主 I し 直 和 Н 国に 感謝 5 解 Q 側

とにあ \mathcal{O} 日本の障害者に対する援護法制定に向けての環境を作るというこ 部分を日本に送り出 こうして作られた日米の 載された記 ったが、 女史の それに 事の 来日であったと言える。 部であ したのであった。 しても 和解ムードを象徴する出 る 米 国 はその良心を代 以下は 彼女自身の来日目 「長崎 来事 日日 表する最良 争 が、 新 的 聞 は、 ヘレ

る子に愛の 年の月日が経ちました。 鳥 キス ケラー 祈る長崎の 女史来る・こぼ こ の 十 復興」: この れる慈愛の 年の間に私が長崎 前 微笑 私 が訪ね 花 てから 束 の方 棒ぐ

> の街を、 美しい 貴方方の ることだと確信して居ります。 を思い出させます。 が痛くなって参ります。 て下さい。 Þ から受け . 長崎 海 そして日本の 優しい Ш に た友情は絶対に忘るゝもので 私はしか に 囲まれ 来た十 心の現れとして贈 だがこゝに美しい海 た長崎がかゝる姿になろうとは し心に悲しみを一ぱい持っております。 年前の 美しい姿が皆様方の手で必ず再建され かく焼けかく破壊され 日を思い られ 出 た花は が川 していることを知っ はありません。 が 私に感謝の言葉 た街 囲んでいるこ の中から -全く胸 が

(一九四八・一〇・一七)

思うと誠によろこばしい」と述べられたのだった。 慰めてくれ く握られ ましょうと何度も繰返していた。 と答えるとケラー だめになったが魂はまだまだ世界平和 あ ら日本のはてまで来て原爆の地でこんな小さな家に寝てい のことはよく聞き知っておりました。はるか遠いアメリカ あいさつもそこそこに私に握手を求められた女史は た。あの時私は本当に青い鳥が飛んで来たという感じだった。 言葉を聞いてただ感涙するのみだった。 予報も何もなくしてこんな家に突然の来訪をうけて恐縮 7/ なたにあえて、 貴方にあえて嬉しい て 神 0 私がかねがね思っていたことを言えるかと 恵は 女史は非常に喜ばれてお互 あ なた達の上に豊 永井博士を訪れたケラー 私の二人の子供の手まで固 \mathcal{O} 為に働 かに注がれます」と 「私の体はすっか 1 同 ける 世の為にな 私はこの のです」 「あなた 女史 カュ V) V) る

後半の記事は永井隆の回想の一部だが、それにしても〈原爆投下」

に 0 は 当 良 動 玉 であ 3 心 せ こるもの な る 面 米 国 が であり、 あろう。 から その最 来た それはまさしく 良の相貌を印象づ レ ンケラー 「米国」 女史の けた瞬 勇気 という 愛情 他

四 米 国 の 復興支援

った。

らの な現 ら始まる。 見てみよう。 白 にも多少 スト教会」に関する事柄になるが、 よく応えていたと言える。 たって深刻の度を増 く資金不足で 「状態から多く 保と共に、 方針と共に、 極に立 たの 供 象があった。 である 解れることになるだろう。 元は ち上 その背景には、 あっ 多くの 論の性格上、 戦前戦. 米国」 0 が た。 日 キリスト教会は った長崎 本 し加えて行ったが、 来会者に対応すべ 人が 中の それは食料、 以外にはなく、 価値 すでに ここでは長崎のキリスト教 その中心 を待ち受けていたの キリスト 観 触れたG 旧 0 - 教会に: まずは、 は当 生活物資、 来 崩壊がもたらした内 カトリック教会に < の信徒 また 然 当然のことながら 集い Н 早急な再 プロ 「米国」 教会再 \mathcal{O} Q 資 材 始め ため は、 0 テス キリ 建 \mathcal{O} たという新た 建 は 0 言うま 礼拝 ィスト ト が界に絞 その が 関する事柄 タント すべてにわ 求 O面 ·教支援 援 8 \mathcal{O} 的 期 で な空 動か ーキリ られ 場の って それ ŧ

た長 崎 建 色 直 あ 系 近い聖公教会・ここに 村 せ 0 町 た塔上の十字架が教会としての 教会として日英同 \mathcal{O} 長 1崎聖公教会は原子 盟華やかな頃 も米宣教師 爆弾 将校 \mathcal{O} ため 存在、 0 思出 の協 を誇示 灰燼に帰 を秘 力 .. L 8 て来 英国 て僅

る。

助

億 玉

た援 この 金額と言えた。 こうして教会を通じた本格的な支援活 再来訪によって宣教師派遣、 方、「北米」(米国およびカナダ) ネスなど) より教団から離脱する教派 は、「聖公会」を含めてほぼすべてのプロテスタント諸教派を 五千万円) に 九四五年 的に およびカナダ) 時 助 会を ついて具体的 見い出され 分に援助する」 失した長崎 と建築資 知己に呼び 会 が 期 なみに、 \mathcal{O} 加盟の上、 聞いた占領 0 領 平 窓 再 軍 和 を除き、 戦前の 口に 建 付 来 に (昭二〇) べるの きの 金 信 に 上ってい か なっ 戦災教会 \mathcal{O} 引用した長崎聖公教会(「日本基督教団」 \mathcal{O} 徒 教会からの 「宗教団 教会復興 軍 け、 な検討に入ってい 組織されたものだが、 役をと乗り出 鐘 \mathcal{O} 新たに たのは との朗 牧師 のブライヤー 部 間 鳴 一〇月に米軍用機で早くも来訪、 長崎 にでもと五 に り る。 トストバ 復 渡 (四八二教会) 体 報到 る宗 新生 「日本基督教団」を結成してい を去るに当たり同 0) 興 献金計画 (聖公会、バブテスト、 法 そ 至難を愬 戦災教会復興、 0 れ なった 気運 着、 1 教の L により成立した のプロテスタント教会使節団 は当 中尉 た。 |百円を寄 · ン師 解 「長崎新聞」 た 同教会の 盛 は 時 放とと は再 「日本基督教 へたところ、 は特に米本 /はるばる: ŋ (内外協力委員会)。 復興 動 「宗教] としては、 上 0 が 贈 建 が の 展 E 教会松 もに 生活 した。 復興に明る \mathcal{O} 0 万ド い た め に 開 団 悲 て 九四六・一・ 「日本基督 され |体法| 困 玉 海 願 る 救世軍、 ル このほど「十 4 まさに莫大な **|**窮教 このことを伝 今 の一主教に消 岡 \mathcal{O} 12 る 北 ることとな 牧 (邦貨で約 彼 同 \mathcal{O} であっ 翌年春 0 から 情 度聖 師 師 方 を 米」(米 た。 を訪 廃 前 知 0 ホ 教 の援 友 途が 同 った 一公教 止 四 寸 強 \mathcal{O} は IJ

制

脱 うした個 想像 0 記 別的 をはるかに越える規模であった。 事 は、 な援 れ 助 とは 資 金を加えるならば、 別 \mathcal{O} 教会復興 援 助 っであ 北 いって、 米 が 負担し おそらくそ た金

災孤 ック教会がまず対応 これとは別に、 児 \mathcal{O} 救済だった。 カトリック教会の動きを垣 した 0) は、 原爆によって 間 両親を亡くし 見てみよう。 た戦 カト

と加 がこれ等の哀れな孤児を収容行末までの温 ij 戦 舞 奈陀 災孤児に春 ア 0 園 た原子爆 生まれ 災孤児であれば誰でもよく入所の手続きも簡単だ。 が 誕 \mathcal{O} 弾 生。 米女宣 宣教 O惨 資格は三歳から六歳までの 師ソ 劇 がは寄 教 師 がル ル・スタニスクス女史の手で〃 辺 なき戦災孤 マリア 園 かい面倒を見よう 児の多数を生んだ // 創 <u>立</u> (可成女子を 長崎を

的

(「同」 九 四 五 〇·二四)

う

あ

 \mathcal{O}

け、 ラナ 続け 九四七・一一・一)。こうしたカトリック教会の積極 式 ム張りの床、 ″が完成する ガン ć 「長崎 時 神父の 聖 図書室、 軍 G 母 べ 政部 HQの支援のもと長崎県下では最大級 \mathcal{O} ツド、 進言によってできた浮浪孤児収 騎士団」 医 マクドネー 療室を完備 シャワー、 内 に戦 ル中尉の 災孤児収容施設を開 たホテル並 サンルーム、 肝入りによって」 みの 水洗式 容施 建 設″ 設。 的 物 \mathcal{O} トイ 施 な動きを受 だっ 少年の また、 設/ IJ 丿 ノリウ 向陽 洋 町 フ

児収: 0 う の成 容 長崎 所/ 向 功を祈る・ 陽 市 寮 向 . 陽寮 も郊外に近い " (T) 落成 ニブ # が 口 出 式 来上がり、 教育官、 岩屋山ろく岩屋郷 恵みなき子等 マクド 三日 盛 ネ 0 ル 大 な落 \mathcal{O} 温 中 景 尉 か き家県 勝 成 が 式 祝 \mathcal{O} 地 詞

> 日 郷にふさわ ŋ に 示さと、 から 総額 のショ 0 ウシ 長 百六十八万円を投じた二百 倫 しく昨日 となみの期 ヤ 軍 -政府 な建物とその環境 年来崎した″ マ 待を晴れの落成式におどらせてい クドネル中尉の尽力を立 少年 は 恵み $\dot{\mathcal{O}}$ 九 町 + なき孤り 坪 "フラナガン神 \mathcal{O} 木 児の 派に生か 浩 セ 第二 メント 父の \mathcal{O} 明 故 張

この ならば、 リック教会の影響力の大きさは長崎市 としては豪華なもの であった。 にどの程度の支援がなされたのかは ったに違い 施設は 他者」の大きな影が射し込んでいたということだろう。 カトリック教会の 収 ない。 さらに次のような式典が 容定員五〇名で、 忘れてならないのは、 であった。 力の大きさは、 これらの (「長崎日日新聞」 図書室とシャワー 行わ 民にとっては目に見えるも 不明だが、 施 れてい そこにも 設 層実感できるもので \mathcal{O} 建築に対して具体 九四八・二・ たことを考える 少なくともカト 室を備えた当時 「米国」 四

\ \ \ て、 な 米国二千万カ りつくしてゐ \mathcal{O} 玉 ふ 十 のであ の地で聖別された教会があなた達が原子爆 カトリック四使 信仰に結ぶ日米・ 今日 オ ハラ司 兀 力 ŋ, . (T) 日 この エ善意の IJ さうした意味で私共は今後ますます トリック信徒とは同 る善意に満ち 教等を迎 ツ 苦痛 ク 人々 \mathcal{O} 節団 愛 \mathcal{O} 浦上天主堂の礎石祝別式」: 十三日 な 0 へて再建浦 バッファ教区 "を創造する様努 集ひ カコ た神様 にあることは皆さんのすべてを知 (「長崎新聞」 のうちに執行され じ宗教を奉ずる謂 の思召です。 上天主堂の礎石祝別式は (ニュー 一九四六・七・一五) 方 弾の洗礼を受け な 日 け /あなた方と ,密接に協 · ク 州 れ /しか ば は ならな は兄弟 夜 米 力 き 彐

ない。 ク信徒の 犠牲と引き換えにもたらされた平 11 ったが、 復興支援 米国」 原爆によって最も被害を蒙 は 原爆投下国 カトリック教会のこの への大きな期待 米 国 を呼び覚ますものだったに 和 の感謝と に対する憎 0 たのは 呼 び か け 米 力 には、 悪は \vdash 国 IJ 発見できな そ ツ 力 $\bar{\mathcal{O}}$ ク 信 トリッ 膨 違 大な 徒だ 11

戻るが、 再びこの 次は 彼らにおいても 論 長崎日日 \mathcal{O} 本題である L新聞」 「米国」 プロ に掲載された支援の一 テスタントキリスト は力強い支援者として登場 部であ 者 0) 心して 側に

業として 館 建 うち百五十万円は 政 から精洋亭に各方面の代表者約三十名が参集し、 Ш ることゝし、 た米国 ĺ [長崎 部 の建 米国 設 (西学院 西学院 声は 同 ル 同 デ .情者よりの ル 情に仰ごうというの さんも臨 商 設は各方面 の寄付も仰 長崎市 第 \mathcal{O} は鉄筋コンクリー 工 が原爆 ア司令官代理マクドナルドさん、 一会議 復 第一 次は 興 牧師さんがこれに同情して救援資金補助 席、 所 民 次事業には参百五十万円の資金を要するが 長崎 会頭 ぎ・ アメリ 募金に期待され、 .仮会館として木造瓦葺約五百坪、 「から要望されていたが、 「の文化的社会的センターとしてY 0 ため 会館建設後援会発会式を挙げた。 Y M が発起 市 カの 破壊 内 である。 有 1 C 救い 志より寄付を待ち、 人代表となり二十五 され悲惨な状況にあ 地 A会館・長崎市の文化センター 階共五階建の本会館を完成す 0 手」: 長 本館建築費は全部 九四七· 大橋 倫 教育補佐 長崎市 城 山町 特に長 貮百 ることを知 日午後四時 六・二七) 第二次事 M その 光国民 万円は 官メン 資 に 長 C〈崎軍 あ A 会 建 脇

カン

6

部抜き出

してみよう。

内 キンス牧師であった。 建を知って立ち上がったのはサンフランシスコ、 西学院は諌早に移転、 な数字は不明)、教職員の家族三○名を失っていた。 場として使用されていた校舎には さに彼らの厚い れ 近く同校宛に送られて来ることが報じられ \mathcal{O} 西学院中学校 後者に関して言えば、 Δ 米国 は政 五日後の新聞には、 あるいは (人口二万) 一〇三名が死亡。 ども是非送りたいという嬉 7 査 (邦貨にして三百七十五 (府間 1 のため去月二十六日 キリスト教信徒 る鎮西学院中学校 援助であるガリオア・エ 「米国」キリスト教会から送られて来たララ物資。 は壊滅。 のメソジスト教会 友情を示す 最終的には教職 薬品、 これが鎮西学院の 当時、 爆心 戦後に再出 0 地から É 献 を訪 はる 万円) 学校 タイプライター、 金 \mathcal{O} ばる諌 L 問 で (信徒八百名) の援助 五百 献品 あ 「発を期してい の他に三菱製鋼 1 一一八名の男女が 員五 話 種 0 ロア援助 た。 早 による援助物資で X 々 資金や 調 市 復興の始まり 名、 同じく で不自 査し 1 ている 生徒 ル (資金)とは別 のジ ピアノ、 た。 運動 本 0 長崎 距 年 由 三菱電 具、 彐 ー リン その困難な再 この結果、 〇二名 いたが、 離にあ 中に二万ド な授業を行 で (-)日 ミシンが 学用品 あ 日 八。 いった鎮 る。 ウィ グゲー 機 ŋ 定 その の エ ま 鎮 ル 確

った。 0 M CA社会部 病人乳幼児にララから贈 るが 右 \mathcal{O} 内 木 今回ララよりミルクその では未帰 [窮者 \mathcal{O} 還者 病 物 乳幼児 戦死 長崎 者 などに配 Ý 他 引 M (一九四七·一〇·九) 滋養物 C A 揚者 給することにな \mathcal{O} 宛に」: \mathcal{O} 援護事業を行 配 分があ 長崎 Y

する。 本県に 女史が十八日来県打合せ、 る予定だが 女学生にララ物 配給され この 資配 配給につい 長崎佐世 給 併せて県下の社会事業施 保の ララ物資とし てララ物資中央委員 女学生と女専 て洋 生 会の 0 地 設 配 五 を視察 口 給 +] 梱 ズ れ が

ララの 老院、 戦災国救済物資を集めるため全米各地を巡回する〃 れば米国農村キリスト教徒 農民達が寄付したもので、 百三十二トンの大豆が近 学生などに配ら 駐 日 カトリ ノック代 れる。 表 (旧 Η く日本に到着 • フェ 数) 到 着次第孤児、 海外援助計 ル セッ 」する。 力 九 四九 結核患者、 画 師 この大豆は に対する総 \mathcal{O} 友情列· 発表によ 兀 九 養 車

その 人に で取り上 六年生一人あて鉛筆、 面 だことは否定できない。それにしても たであろう。 特に長崎に限って言えば、 者」 他 他、たとえば「アメリカ少年赤十字」か 彼は友情と愛情 本心から 個 0) は、 一げた事例は H の割で慰問袋を、 用 威圧的 また、 品 のものであ が配られている そのことが長崎に対する濃やか に厚い隣人でもあった。 な勝者としての 一部にすぎないが、 消しゴム、 中味は ったという印象は強 原爆投下国という後ろめたさは深 石けん、 便せんの一 (一九四七・一〇・一一)。 み振る舞ったわけでは 「米国」が見せた素 明らかに 歯磨き粉、 ら慰問品が届 組、 もちろんそこには、 四年生以下は三 「米国」という な配慮が 歯ブラシ、 き、「五、 心を生ん なかっ 顔 لىلى か

鎮 次に引用するの 一学院と並ぶミッシ 民 主教育に最善つくす・キャリー は 「長崎 ョン ス 日 日 新 ク 聞 ル 活 .水学院 に掲載された記 女史、 0 七年 状 況 振 で 、ある。 事で b) " 活水 //

> します。 たキャリー 義教育はこれからどんな風に \mathcal{O} は に取りかこまれながら く変り果てゝはい ので二十 活 授 女専に向 如何 家に帰ったようです』と心から嬉しそう。 水 帰 キャリ 「る」 : // ですか .. の -日午後 かった。 ĺ "とにこやかに答え、 赴任を心待ちにしてい 女史は嘗 女史 開 戦 #の記者 は 五. 前 、るが 時二十分着列車 五. ア っ て の メリカ 日 七年振 \mathcal{O} 再び 古い 質問に″ 再び長崎にお帰りになっ 日本を訪 へ引き揚げた元活 りの 友達や活 "との問い 生徒代表の花 大変幸福です。 · で 来 たが、 懐しい長崎駅頭に ñ 九四七・一・二一) 水女専 崎、 に 宿舎 時 今は 神 // 私は最善を尽く 東を受けて活 音 \mathcal{O} 戸 水 で思 日 楽 見るかげ 進 女 本の ての 有音 科 まるで自 備 0 下 ŧ 生徒 民主 り立 ·楽科教 御 出 出 来た 0) 感 £ 分 想 無 達

帰 真実以外の何物でもないだろう。こうした中、 宣教師である。 授オリーブ・カリー ここに登場する「キャリー った中で一 玉 \mathcal{O} 道を断たれてい 九 四 戦後いち早く活水に戻った彼女の愛情の 年 (Olive (昭和一六) 九月まで活水に止 た一人の教師が活水に復帰 女史」とは活水女子専門学校音楽科 Curry)女史のことで、 日米開 する。 ま 日米開戦が 戦 0 深さは、 た最 後 迫 教

戦 スト ン大学に に 」: 活水 帰 争のため 科学的知識を養いなさい・在米九年の わたる在米生活を終え、 b, 教 会の なつか 家事学を専攻 帰 女子專品 派 国 遣でアメリカに留学、 『が阻ま 門学 の学園に落着い れ して十六年 校教授鶴田 このほ さらに三年ニュ た。 十月学位 ど横浜着。 千 オ 代子 ハイオ 昭和十三年八月 鶴田女史懐 女史] を得たが、 二十二日夜長崎 ヨークシラキ 三九 ウェ ス L 太平洋 パメソジ の活 レ は 九 年 T 水

教育人は数少く鶴 ア郊外にあるストレ ス大学で教育学を修め卒業後 |校家事課長でも 田女史をふたゝび迎えた活水はもとより、 イン・ あっ た。 ファー か ら帰国前 アメリカから終戦 ム校の教師として裁縫 までフィラデル 後帰 朝 を担 した フ 1

のでは、 者 弟は原爆で死亡しており、 要注意少女の教育にあ 々(キリスト教徒)がいたということであり、「米国」という「他 は驚くべきことであるだろう。 強制収容所に隔離し、 ものだった。 育で過ごし、 の彼女に学校の重要な地位を与えて生活を支えていたという事実 女が勤めて だ彼女の真実だった。 の多様性が伺える例と言える。 彼女が受けた金銭的支援 教育界では相当な期待がもたれている。 女の なかったに違い 心に映る「米国」という「他者」 それにしても、 あと半年 1 た 「ストレ ない。 徹底的に管理下においていたことを考える は農耕・ たり在校生は四百 後の平和運動への関わりの原点となる イン・ファーム校」とは しか 開戦後 (学費) そこには差別と偏見を抜き出 家事を行いつつ教育」するという 実は彼女の 「米国」政府は日本人移民を 彼女が 並びに敵 名/一年の半分を普通教 は単純な像を結ぶも 語るの 渡米中、 玉 人である日本人 は 「特殊学校で (一二・二五) 「米国」 両親と兄 た人 で

う。

られているが、

その中に活水関係者がいたことを次に取り上げ

家庭をつくる素地をつくるのです。 て乏しく教育を受けるに気の毒なほどですが H 本 0 を常に注 女子学生に対し 学的 意して養いなさい。 になっ た婦 私はこう望みます。 人によってこそそれ 日本の そして健 街も家中も 1 まわ 康 な無駄 は L 繑 が国 かし科学的 正される \mathcal{O} は な すべ 同 所 11

> スト者を多く自国に招待して学問研究に専念させたことはよく知 そ絶対平和 鶴 特に注意すべきは が (フレンド派) ったのも彼らであったことは知っておく必要が ところで「米国」 田女史を雇い入れた「ストレ 主義者であって、 教徒の経営する学校と考えられ 「米国」 キリスト教会は戦 キリスト教会の 敗戦国日本の支援にいち早く立ち上 イン・ファー 後、 資力の 献 · ム 校 身的 るの ない な働 あ だが、 は 日 クエ きで 本人キリ 彼らこ 1 あ カー

この時、 となる。 味を持っていた。 幸 子 在 ンで渡米後の費用 両女史とも同校には二十年間勤務している熱心なクリスチャ 日本人教授の選考を行ったが、 メソジスト修 期間 活水 長崎 回 は \mathcal{O} 約 から選ばれたということは、 先 生 一力年。 岩崎 しばらくして次のような記事が報じられること 道 局では日米文化の交流 招 ヤス かれ 切 は修道局で担当するという好条件。 五 〇 て渡米」: アメリ 両女史を候補者に決定した。 その結果、 を図るため おそらくある特殊な意 力 長崎活水女専雨 九四九・ = ユ 招 匹• 日 V] する ク 五. 滞

報道し、 九 ナ 月七 米紙 ビュ ヤス ガサキか 女] 日 のトップかざる・Victim Glad Atombomb Ended War・ さらに大橋市長が記した「長崎 史 付米国アイオ の原爆体験 紙 ら初の女性 はト ップ 見出 を語る―と岩崎 ワ 州 岩崎女史 しで滞 都デ・モ 米中の // イ 火の ン 市 女史の写真 市民は 長崎活 このデ 洗 礼 原 水女專教授岩 でをか 爆が日本国 モイン・ト 体験記」: かげて

る 目。 着したもので九月八日は同市が全米にラジオ放送も行ってい きな反響を呼び起こしながら八月三十一日デ・モイン市に到 サス、ミズリー ワイト氏に迎えられて八月初旬からロサンゼルス夏季学校を 和に立ち上る長崎市民の真情を伝える講演旅行をつづけて大 皮切りにカリフォルニア、 七月十三日サンフランシスコ到着後の岩崎 る」というメッセージの一部が掲載され、反響を呼 民を平和 ている。 日 なお岩崎女史は現在シカゴ市ノースウェスト大学に在 曜学校、 0 使徒たらしめたので、これを火の洗礼と呼ん 0) 教会や婦人会などで長崎について語り合っ 各州 で温 アリゾナ、 11 米国 人の好情をうけ、 ニュー 女史は前校長のホ メキシコ、テキ んでい 各地で平 · 四) でい る。

うメッセージは、 最良のメッセー からである。 本支援を心に誓う筈でもあるからである。 女史の講演は、 「米国」という「他者」を、 それと同時に、「米国」という「他者」 ジだったに違いない。 原爆投下国という負い目を払拭してくれた筈だ おそらく「米国」という「他者」 少なくとも長崎に関しては 彼女の 心理的にこのメッセ 「Victim Glad」 とい はさらなる にとっては

> 異国の まない 国 リスト者」 くとも長崎の「プロテスタントキリスト者」と「米国」という「他 は 原爆に関わ ない。 が歩み寄れる一線があった。それは長崎 という「他者」 「米国」と、 「他者」として意識し続けて来た長崎 それは彼女の真情でもあって、ここに長崎と、 が共に演出した一線だった。 る重圧 から解放してくれただろう。一方、 歴史的に におもねって、自己の真情を歪曲したわけで 「米国」 0) 影を背負 の再建に協力を惜し ープロテスタントキ V) 彼 最も身近な 否、 女は 少な

[参考文献]

館収蔵。 聞」は改称して「長崎日日新聞」となる)いずれも長崎県立図書『長崎新聞』および「長崎日日新聞」(昭和二二年以降「長崎新

『活水学院百年史』(昭和五五・三)

『日本基督教団史資料』第三巻 (一九九八・六 日本基督教団出

版局)